

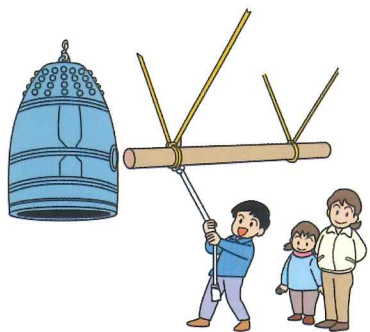
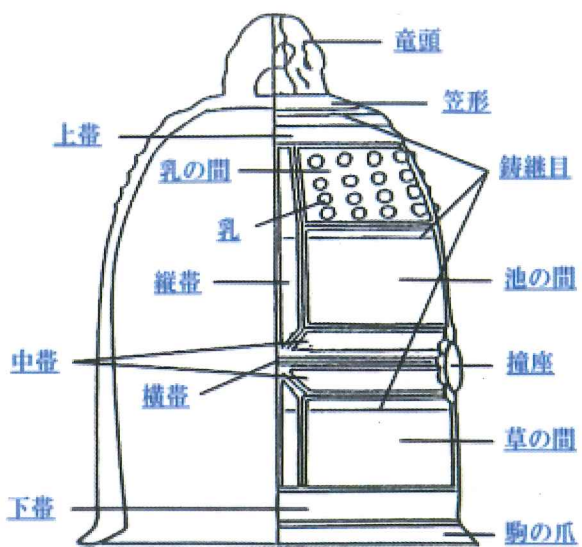
大塚・西證寺には享保五年(1720年)河州茨田郡牧方住田中河内大目藤原家成の銘のある半鐘があります。北河内に多く現存する枚方の製造元による鐘です。尊重寺の半鐘も同じく享保五年製で西證寺と同じ銘が入っています。また下田部・一念寺には天保十三年(1829年)、福井[?]住塩田莊助藤原順之の銘をもつ半鐘があります。数は少ないですが茨木や箕面の北摂地域に現存する現在の茨木市福井の製造元による鐘です。

治工名はありませんが梶原・西法寺には寛政四年(1792年)、大塚・善立寺には延享二年(1745年)の半鐘があります。

このように現存する半鐘から造られた時代が判り、住職は代われど梵鐘や半鐘が長い歴史を経て寺に存在し続けていることに感謝を覚えます。

参考 天岸正男編「大阪府鐘銘聚」

鐘の各部位の名称



千歳の闇室

譬如千歳闇室光若・至即便朗

闇豈得言在室千歳而不去耶

たとへば千歳の闇室に、光もししばらく至れば、すなはち明朗なるがごとし。闇、あに室にあること千歳にして去らじといふことを得んや。

〔教行信証〕、註釈版聖典 頁、『往生論註』引用文)

たとえば千年の間、一度も光の入ったことのない闇に閉ざされた部屋があったとします。この部屋に少しでも光が入れば、たちまちに闇は破られ明るくなります。千年の間、闇に閉ざされていたからといって、その暗闇が光を遮ることはありません。同じように、迷いの闇は真実の光によって、たちまちに破られるのです。

「千歳の闇室」は、曇鸞大師の『往生論註』に説かれる「八番問答」の第六番目の問答にでてくるたとえです。本願には、「唯除五逆誹謗正法」と誓われ、一方、『観無量寿経』には、五逆・十悪の罪を犯してきたものが、臨終の十声の念仏によつて必ず浄土へ往生する身に定まると説かれています。これらの相違を矛盾なく解釈したのが「八番問答」です。

五逆や十悪の悪業を行なう無明煩惱を「闇」に、悪業を重ねる迷いの凡夫を「室」に、その凡夫が悪業を犯し続けてきた時間の長さを「千歳」にたとえています。また、念仏を「光」にたとえています。

無明煩惱を闇として自ら知ることのできない者のことを凡夫といいます。空中に舞う埃は、光に照らされることで、初めてはつきりとその存在を知ることが出来ます。同じように、私自身の煩惱は、阿弥陀仏の光明に照らされることで、その存在をはつきりと知ることが出来るのです。

凡夫の悪業と十声の念仏とを比べますと、世間の常識では、わずか十回ばかりの念仏よりも、長い間犯し続けてきた多くの悪業の方が強いように思われます。しかしながら、両者の行いを比べると、虚仮の心によつて生じる悪業よりも、阿弥陀仏の真実の心によつて生ぜしめられる念仏の方が強い力を持っているのです。つまり、地獄に引く悪業の力よりも、浄土へと引く念仏の力の方が、比較にならないほど強いのです。

(浄土真宗本願寺派総合研究所より)

島上南組 だより

浄土真宗本願寺派
2018年(平成30年)1月
第7号
編集・発行
高槻市大塚町西證寺内
島上南組実践運動委員会

組長ごあいさつ

島上南組組長 尾崎貞良

新年明けましておめでとうございます。

皆さまにはお念仏の声高らかに平成三十年をお迎えいただいたこととお慶び申し上げます。

昨年は六月に島上南組仏教婦人会結成五十周年並びに仏教婦人会若婦人部結成十周年記念大会が開催されました。

九月には寺族婦人会結成五十周年記念祝賀会が、大阪教区教務所長、熊谷正明様ご臨席のもと、厳粛かつ盛大に開催されました。

昭和から平成という激動の時代を生き抜かれ、家を守り、家族を養い、子を産み育てながら、地域のため、お寺のため、組のために半世紀にわたりご苦労いた

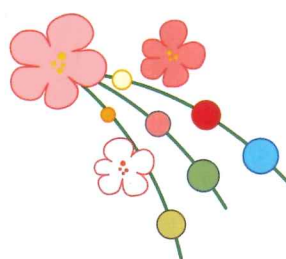


きました女性の活躍に敬意を表したいと思います。また、その苦勞と願いは多くの先人たちから若婦人部へと受け継がれていることが何よりうれしく有り難いことです。

人はみな、母から生まれ、おっぱいを飲ませてもらい育てていただきました。お父さんは父ですが乳は出ません。やはり母が命のふるさと、抛り所です。しかし、この世は無常が定め、この世の縁尽きれば親と言わず、子と言わず、時には命に代えても思う孫であろうと終わっていかねばなりません。いのちには順番がないのです。そんな苦悩の私を見抜いて阿弥陀さまは、限りなきいのちの親となつて立ち上がり、摂取不捨の姿をもって休みなく私を摂め取ってくださいなのです。



「なまんだぶ」を称えつつ、わかり合い、助け合つて生き抜いていきたいものです。今年もよろしくお願ひ申し上げます。



総代会より

総代会会長 玉村圭二

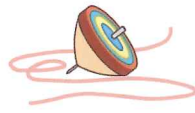
研修会を年三回テーマを決めて実施しています。現在のテーマは、会所の「住職と語らう会」、浄土真宗必携「み教えと歩む」です。聞法会を年一回行い、本年度は九月十四日に正覚寺で講師に福井教区若狭組、徳成寺前住職、鳥羽正和師を迎え「本願力に生かされる」をテーマに講演をしていただきました。

参加者四十二名組内寺院報恩講参拝を九月三十日から十二日の間に五ヶ寺の報恩講に他寺院の総代を五班に分け、各寺院を参拝しました。また津村別院の報恩講団体参拝を十一月十三日に参加者二十八名で行いました。この行事は三年ごとに実施しています。

仏教婦人会より

仏教婦人会 副会長 溝口紀代子

十一月一日(水)仏教婦人会研修会を「富田御坊本照寺」の報恩講に四十一名の参加で参拝させていただきました。野村康治師のご法話を聴聞致しました。本照寺は本堂、山門、鐘楼、東門が高槻市有形文化財に指定されている蓮如上人ゆかりのお寺です。お昼には本照寺仏教婦人会の方々が作られたお弁当を、参拝された皆さまと一緒に美味しくいただきました。



早朝より準備されていたのでしようね、心づくしのおもてなしに感謝致します。次の研修会は、仏教婦人会五十周年、若婦人部十周年記念事業として平成三十年二月に和歌山方面に出かけます。ぜひ、ご参加いただきますようお願い致します。

若婦人部より

若婦人部長 土井真由美

十月十六日正覚寺にて、第一回若婦人研修会を行いました。開扉後「重誓偈」を三十八名の参加者でお勤めしました。今回のご法話は「共働の力〇〇ファーストでいいの?」というテーマで本願寺西山別院の内本隆宏師に講演して頂きました。今年流行の「〇〇ファースト」というフレーズを聞いて、「一体どんなファーストなんだろう?」と、ワクワクしながら話に耳を傾けていると『特定の人だけが優遇される世界を自分の好き勝手に生きるのではなく、多くの人に支えられ、助けられて大切な命と共に生かされている(共働)ということに気づく事が大切である』と、親鸞聖人のご生涯と合わせて楽しく分かりやすく話していただきました。講演会終了後は先生にも同席していただき、茶話会形式でケーキと紅茶をいただきながら質疑応答を和やかな雰囲気の中で行い、親睦を深めることができた研修会となりました。



寺族婦人会より

普賢寺 横場由幾子

「五十年の歴史をいまここに繋ぐ」九月二十八日、島上南組寺族婦人会五十周年記念祝賀会を開催しました。尾崎組長様をはじめ総代会玉村会長様、仏教婦人会辻井会長様からご祝辞を頂き、ご来賓の熊谷教務所長様によるサクスク演奏、畑中様のピアノ演奏、笑福亭縁様の落語で盛り上げていただき、寺族会員による「蜘蛛の糸」の紙芝居と「なまなもクイズ」と盛りだくさんの祝宴の中、無事終えることができましたことを大変うれしく思います。



この祝賀会を通し、改めて寺族婦人会を築き上げ、五十年の間、会を続けてきていただいた諸先輩方に心より感謝し、益々これからの活動がその想いを次世代に繋がっていくことを心あらたに銘じ、念じたいと思います。十月十二日には第二回研修会を行い、奈良教堂を参拝し、教務所長様より奈良の仏教、歴史などについてお話をいただきました。そのあと今年、落慶された薬師寺食堂や唐招提寺で多くの国宝や重要文化財である建物、仏像を拝観しました。

仏教婦人会、若婦人部の役員様にも参加していただき懇親を深めることができ有意義な研修となりました。



地域探訪

南組寺院の梵鐘と半鐘(喚鐘)を訪ねて

萩之庄西教寺門徒 高村勝子

寺の什物(備品)である梵鐘と半鐘は法要や儀式を開始する合図として鐘(つ)かれます。梵鐘は儀式以外にも朝夕の時報がわりに撞かれることがあります。梵鐘については戦時中に供出されたため、古いものは現存していない寺が多いと思われませんが、半鐘については供出を免れ、鑄造された時代から現在に至るまで残っているものが見られます。彫られた銘を調べると歴史的にも興味深いことが判ります。以前、南組寺院の半鐘の調査に携わったことを元にして一筆書いてみたいと思います。

淀川沿いの道鶴町・圓正寺の半鐘は池の間に鳳凰が飛ぶ美しい文様が彫られ、銘に享保拾乙巳七月(1725年)、治工三條釜座(かまんどろ)、和田信濃掾とあります。また前島・本宗寺の半鐘は銘に安永四未年(1785年)、治工三條釜座、和田國次とあり、ともに高さ60cmの大きなものです。東天川・西法寺には宝暦七年(1757年)大覚寺にあった治工三條釜座、和田信濃、藤原國次の銘をもつ半鐘が残っています。

供出されたため現存はしませんが、残された記録によると冠・尊重寺には明和五年(1768年)三條釜座和田信濃掾藤原國次の銘が入った梵鐘がありました。これらの半鐘や梵鐘は京都から船で淀川を下って送られてきたものでしょう。現在でも京都の三條釜座通りには鑄物店が軒を並べています。

